私小説作家論

山本健吉

福武書店

私小説作家論

山本健吉

福武書店

山本健吉（やまもと・けんきち）一九〇七年、長崎市に生まれる。本名石橋貞吉。父は石橋忍月。一九三一年、慶大国文科卒業。折口信夫に師事し、日本民俗学に造詣が深い。改造社で雑誌「俳句研究」の編集長をつとめた。一九三九年、吉田健一、西村孝次、中村光夫らと「批評」を創刊し、同誌に連載したエッセイをあつめて、一九四三年、処女評論集「私小説作家論」を世に問うた。他方、芭蕉を中心とする俳句について深い教養をつみ、独自の批評的世界をつくるに至った。主な著書に「古典と現代文学」「小説の再発見」「芭蕉」「柿本人麻呂」など。一九六六年、日本芸術院賞受賞。一九七三年、「最新俳句歳時記」で読売文学賞受賞、一九八一年、「いのちとかたち」で野間文芸賞受賞。日本芸術院会員。現日本文芸家協会理事長。

私小説作家論

一九八三年四月二〇日　第一刷印刷
一九八三年四月二五日　第一刷発行
定価一三〇〇円

著者　山本健吉
発行者　福武哲彦
発行所　株式会社福武書店
東京都千代田区麹町六―六
〒102 電話(03)二三〇―二二三一
振替口座(東京)六―一〇五〇九七
印刷・製本　大日本印刷

(落・乱丁本はお取替え致します)
©Kenkichi Yamamoto 1983

ISBN4-8288-2052-3 C0095

目次

葛西善蔵 5
牧野信一 27
嘉村礒多 54
宇野浩二 70
岡本かの子 102
北條民雄 113
瀧井孝作 124
志賀直哉 148
梶井基次郎 181
上林暁 195
田中英光 211
原民喜 229
初版あとがき 245
改版あとがき 249
解説 高橋英夫 251

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私小説作家論

葛西善蔵

おそろしく豊富な逸話の数々が伝えられてはいるが、極めて貧弱な作品の量しか我々に残さなかった男――葛西善蔵の四十二年の生涯について語ることは、誰にも一応たやすいことと言えるかも知れない。だがその容易さが、葛西善蔵という決して偉大とは言えないが一つの無垢な魂の、戯画化された肖像を世の中に弘めてしまったということも事実なのだ。この試論において私は、彼の心の貧しさについて語りながら芸術家としてのその光栄に触れたいと思うし、彼の苦悩の痛ましさについて述べながらその幸福の真の表情を捉えたいと思うのである。

＊

「俺は忍路高島を唄はう。忍路高島は俺の少年の夢だ。俺は少年の夢を抱いて忍路高島を放浪したのだ。俺の胸は火であつた。けれども俺は凍え死なうとした。」――これは大正元年彼が葛西歌棄の筆名を用いて同人雑誌『奇蹟』に発表した第二作『悪魔』の中の一節である。少年の日の燃えるような勃々の心情が、ここには響高い浪曼調でもって回想されている。作中人物の口を藉り

て彼は己れの北海道放浪時代を追懐したのだが、この烈々の言葉にはたとえ事実の誇張があるとしても、肺腑を衝いて奔り出た詩人の言葉の持つ真実の響がある。この散文詩のような一節は当時廣津和郎氏等『奇蹟』の若い同人達を強い感銘で捉えたもので、折に触れては繰り返し彼等に吟唱されたのであった。しかもこれを書いたのは、追分節に歌われた地名を取って彼が自ら「歌を棄てる」と名付けたように、我と己れの青春を圧殺しつつあった時期のものだ。すなわち彼が生活苦と芸道精進の一筋心とから、妻子をば郷里の実家へ帰して、薄汚い下宿屋の一室に籠り、東北の雪の中で飲み習った酒に憂いを遣っていた二十六歳の時である。「あゝ少年の夢よ！　俺にも今では忍路高島も唄へない。俺には全く醜い歌しか唄へない……」と彼は現在の我が身を自嘲する。だが果して彼の火は掻き消えてしまったか。もちろん私はそうは思わないし、それはまた「苛烈（ピタネス）」と言われる彼の生涯の作品が証して呉れるところだ。少年の日の吹雪荒ぶ曠野の夢を、彼は心身共に市井の辛労に打拉がれながら、死の日まで守り続け、燈し続けて来たのであった。

彼は明治二十年一月津軽弘前の産である。家は米仲買業であったが、家業非運に際会し、幼にして北海道後志国寿都、または青森・五所川原・碇ケ関と転々した。この間に母を亡い、継母の手で育てられた。十四五歳の頃家運挽回の志に燃えた彼は青森に丁稚奉公に出、または遁げ出すように出京して新聞売りのかたわら夜学に通った。彼は美しい声を持っていたので、ヴァイオリンを弾いて流し歩く唄売りの群に投じたこともあるらしい。十六の時碇ケ関に帰り、まもなく北海道に渡り、岩見沢で列車の車掌となり、また営林署に勤めたりした。その頃のことは後になって彼もあまり言うのを好まなかったらしく、作品にも殆んど書いていないし、また親しかった友人達にもおぼろげにしか知られていない。だが放浪は彼にとって、常に傷つき易い魂の新しい栖

を夢見て試みる一つの遁走譜であったのだ。

それは冬であった。船は赭岩の聳立したような津軽・斗南の両半島を左右に見て、津軽湾を北へ進む。海峡の荒浪を越えながら、少年の彼の心持にまざまざと触れて来たものは、本土を追われ、うつろ舟に乗って同じ島へ渡って行ったアイヌ族の悲哀である。そして彼に敗残の民へのそのような同感を強いたのは、同じく追われるように故郷を去る我が身への憐憫に外ならぬのだ。彼の首途が要するに悲しい遁走に過ぎないのは、彼が現実の試煉に対して常に弱い、傷つき易い、無垢な心を持っていたからだが、それにも拘らずその傷つき易さこそ、彼にとって終生経験の新鮮さを保証したものであり、従ってまたそれは存在の証しであり、創造の源泉なのである。それこそは常に彼の燃ゆる胸の燈心を掻き立てる役をしたのだ。彼の芸術はそう言った人間の弱さと貧しさと卑小さとの意識を基にしていた。もしそのような源泉の感情が彼に欠如していたら、生活の困窮はとっくに彼から創造の根を断ち切ってしまっていた筈だ。

明治三十七年、十八歳の折再び上京し、間もなく東洋大学聴講生となり、また早稲田大学英文科に籍を置いたこともある。二十二歳の三月結婚、四月には始めて徳田秋聲氏の門を敲き、爾後終生氏には師事したのである。その頃の彼の生活を物語る文献は、例によって極めて寥々たるものだが、『悪魔』の中には追想めいた次のような文章がある。

……僕はあの時分から駄目だつたんだ。あの時分から僕の病気はだん〳〵ひどくなりかけてゐたのだ。僕は教室の後の隅つこに小さくなつてごちや〳〵と並んだみんなの頭ばかり見てゐたのだ。そしていろ〳〵な円い、角い、尖んがつた、圧しへされた、旋毛のグイと後に喰附いたそんなやうないろんな頭を観てゐると、俺は訳もなくく〳〵と憂鬱になつて来て、

この世の中が果敢なまれて来て苦しくて堪まらなかつたのだ。けれどもその時分はまだまだ詩人だつた。詩が幾つも〳〵出来た時分だ。俺のノートには講義と云ふものは一行も書いてなかつた。そんないろんな恰好の頭を後ろから眺めて居ると詩が雑作もなく産れて来て、僕のノートはそれでうづまつて行つた。そしてその時分僕は生物学とか進化論とか云つたものに興味を持つて、人間を犬や猫や山羊や鳥類などにたとへることが好きで、それでそんなやうな題の詩ばつかり作つてゐた。僕は何にも学問をしずに退つてしまつた。少しばかり覚えたのもみんな忘れてゐる。たつた、O breaking heart will not break. このテニソンの句だけが残つてゐる。あの真白な白髪頭の先生が——おゝ破るべく、破り難き胸よ——斯う訳をつけて呉れた。それが僕の全体の学問であつた、おゝ破るべく破り難き胸よ……さうしてあの憂鬱な騒々しい動物園から放たれてまア幸福だ、と思つたのが間違ひ！　そこにはアスファルトの道路と、煉瓦の建物と、生活と、人間とが溢れてゐた。それが悉く自分には適しない物ばかりなのだ。……

ここには勿論戯化と誇張とがある。彼は近代日本の典型的な私小説家とされているが、少年時代・青年時代の私生活を彼が回想する時には、まるで帷を隔てたようにイメージは不思議に朦朧化してしまうのである。生活の機微の真実を再現するのにあのように優れた稟質を示した彼であるが、焦点はただ現在の狭い私生活を照すばかりで、遠方は常にぼやけてい、その場合はあの忍路高島の回想に見られるような浪曼的な詠嘆調か、自嘲的な故意の戯化が優位を占めるのである。彼くらい己れの過去に触れるのを厭うた作家もいないが、このことは想い出が常に現在の彼に苦汁を甜めさせていたことを物語るものであろう。したがってその作品の中においては、過去の業

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

行の堆積を背負ってよろめきながら歩いて行く現在の彼の痛々しい姿が映っているばかりである。悔恨が常に彼の作品の主調をなしている。彼はたまたま過去を断片的に語ることがあっても、藤村の『生ひたちの記』や独歩の『欺かざるの記』のような生活資料としての価値は殆んど持っていない。しかも尚かつ、その断章の泣き笑うような表情の中に、彼の精神の所在を指し示すだけのものは含まれているのだ。詩が幾つも出来たというのはそのまま信じ難いとしても、彼が天性詩人であったことは疑いないし、彼が友人等を鳥や獣に喩えるに巧みだったことも事実らしい。そして彼が破りがたない胸を抱き、適応すべき術もなく、「アスファルトの道路と、煉瓦の建物と、生活と、人間とが溢れて」いる真中に、茫然と独り放り出されている姿は、想像に如実に描き出すことが出来るのだ。

彼にあってそのあまりな適応性の欠如は、遂に満足な家庭生活の営みを不可能ならしめた。大正六年を最後として、妻子は実家に引取られ、以後彼等は再び東京で同棲することは無かった。傷ついた心は、幾度か帰郷し、上京し、また遁走を繰り返した。無名時代に彼が妻の父に当る平野弥亮氏、友人光用穆（みつもちきよし）・舟木重雄氏等に出した手紙は、よく当時の彼の生活と覚悟とを物語っている。たとえば明治四十二年、妻子を実家へ帰したまま彼は大洗海岸の旅館に来て、ずるずるに半年余りも滞在するのであるが、その時の平野氏宛の手紙はことごとく勉強のため逗留が長引くことの言いわけと、借金の追加の申込みとである。彼は義父に向って、文学で立とうとする自分にとって、今後の一両年が何物にも易え難い大切な時期であり、将来の運命も決定する時であることを強調し、生活のため職につくことはこの大切な時期を棄て去ることであるとしきりに繰り返し、結局将来への投資としての現在の財政的援助の強化を要求するのである。ところで半ケ年

の大洗滞在も、彼には一作も書けないという苦杯を飲ませてしまう。そして友人宛の手紙には、昂然と次のような述懐を書き送るのだ。

半ケ年の放浪は何物をももたらさなかつた。

僕にしては放浪其物が価値があつたと言へる丈だ。全く此度は命がけで自分を主張し実行したのだ。僕にも生涯二度と、斯んな事はあるまいと思はれる。これでも幸か不幸か亡ぼされるに至らなかつた。却而自分の運命を征服し得たやうな気もする。半ケ年の放浪は、自分の周囲——運命との苦しい戦闘であつたのだ。帰京して君の端書も読み、友人の嘆声も聞いた。つくづく感ぜられる。文芸の前には自分は勿論、自分に附随した何物をも犠牲にしたと——

（光用穆氏宛書簡）

何という直截なエゴチスムの告白であろう。まさしく彼が征服し得たのはエゴチストの運命に外ならないし、適応する術を知らない彼に取っては、逆に周囲をして己れに適応せしめるより外に手は無かったのだ。彼は遮二無二主張する、「我に道を啓け」と。すると彼の周囲のあらゆる人々が、妻子も兄弟も、縁者・友人・他人に到るまで、彼のために恭しく道を啓かなければならなくなるのだ。「いよ〳〵食へなくなると生活以上の道がひらけてくる」（悪魔）とは、彼の不敵な生活態度を物語っている。郷里に遁走していた彼の思いがけぬ上京が、在京の友人たちにいかに怖れられたかは、廣津和郎・相馬泰三の諸氏が彼を主題とした小説の中で、幾分のユウモアを交えながら語っているところだ。窮迫し他人に無理強いに迷惑を掛けながらも、彼にあった優者の意識は、その貧乏を暗い惨めな色調から救っているのだ。有島武郎がある場所で言った「芸術のことは帝王以上のものであり、又乞食以下のものである」という言葉に感銘したらしく語って

いるが、彼には自己卑賤の意識と混淆して王者の意識が強く、その矛盾がモチイフとなって、他奇のない彼の無構成の作品から受ける感銘をかなり陰翳深いものにしているのである。周囲の人人の総ては彼に仕え、彼のためにあらゆる犠牲を払うべき義務があった。そのようなエゴチストの信念を周囲に強いることが出来た始めての実践であったから、半ケ年の放浪も彼には自己の運命の開拓として、将来の輝かしい成果への約束として映ったのである。

彼は己れの芸術のためには如何なる犠牲も惜しむ気は無かった。だがなかんずく自分自身を犠牲にした。周囲に強いた犠牲は結局己れの心の負目として、拡がり木霊して帰って来る。「アスファルトの道路と、煉瓦の建物と、生活と、人間と」のことごとくが自分には適しないものであり、彼の胸を破り、彼の心に傷手を負わせる。彼は友人達に奇病患者と言われた。彼がいかに苦しんでいても、誰も手を下して救うことが出来ないし、また手を下すべき性質のものでもないと言うのだ。もちろんわが胸の痛苦は彼自身が一番よく知っていた。常に周囲の現実との摩擦に苛立ちながら、その苦悩の淵源するとことんの意味ははっきり摑んでいたと言える。言い換えれば、所詮道徳的ではあり得よう筈のない下性下根の生活を送っている彼が、己れの生活の倫理だけは確実に捉えていたと言えるのだ。彼の傲岸は実は謙譲さであり、彼の悪態は実は善意であった。それも彼が己れの全生活を賭けて贖った人間のこの一つの苦悩を信ずるこの上なく優しい心を持っていたからだ。そうでなければ、どうして「身辺雑記の紙屑文学」などと自嘲的な言葉を吐きながら、そのことに不敵な自信の程を見せて従事し、そこに生活の上のありだけの犠牲を払って悔いないでいられたろうか。

*

彼が発表した最初の作品は、大正元年九月、同人雑誌『奇蹟』に出た『哀しき父』である。この雑誌は彼の外に、廣津和郎・相馬泰三・谷崎精二・舟木重雄・光用穆の諸氏が同人に加わっていた。

彼が文学を志すようになった時期ははっきりしないが、明治四十年の日付に始まる彼の書簡集(改造社版全集第五巻)を見ると、文学への一筋の道を念じて呻吟している彼の姿を辿って行くことが出来るのである。その一筋心の衰頽を怖れて他に職を求めることをせず、妻子と離れ、人に不義理を重ねながら、一篇の創作を成就するために日夜懊悩しているのである。それにしても最初の短篇――それもやっと二十枚程度に過ぎない掌篇小説が出来上るまでには、何という長い「書かざる歳月」を持ったことであろう。「作は考へてはゐるが、書いて見る気にはまだなれない。これも自然に開けて行くのを待つばかりだ」とか、「往く処まで行つたら仕方なしに作も出来るやうになるだらう」なぞと訴えているかと思えば、或いはまた昂然と「書けないのは悪いことではない」と嘯いている。「作が書けない」というのは彼の口癖のようになっていたが、それは逆に言えば、それ程四六時中「作」のことばかりを思い患っていたということだ。その頃の彼の姿は、己れの裡に創造への可能性だけを抱えて、その実現の緒を徒らに思い念じているかに見えるのである。機会が無ければ、彼は何時までもその可能性を信じるだけで、一生一作も残さずに終ったかも知れぬ。彼等の仲間うちで、最も「奇蹟」を必要とし、かつまたそれを念じていたのは、他ならぬ彼自身であった。

『奇蹟』の創刊が彼にその機会を与えたとしたら、それだけでも意味があったとしなければならぬ。雑誌発行に必然的に伴う原稿締切日の強制が無かったら、彼の殆んどの作品は存在しなかったろうということは、彼のためには淋しい想像であるが、有りそうなことなのだ。彼の第一作『哀しき父』も締切日にとことんまで追いつめられて、徹夜の挙句やっと仕上がったものだが、書上げるためのそのような苦闘は、彼に終生つき纏ったのであった。したがって彼ほど自分の一作一作に不本意を抱き続けた者も居ないが、また彼ほど作品の中に打出された凜然たる己が資質に自信を抱き続けた者も外に無いのである。

当時は『スバル』『三田文学』『白樺』『新思潮』等反自然主義の雑誌が叢り起った時代であり、自然主義文学の単調さに対して、一種のダンディスムが、すなわち新しい衣裳、珍しい色彩がしきりに要望されていた時代であった。その中に在って、『奇蹟』はその新しいいずれの流派とも関係なく、かえって自然主義の本城と目された早稲田系統の人達を中心として結成されていたので、傾向としてはその残滓を一番濃厚に保持していたし、衣裳は最も古びていた。葛西自身師事していたのは、日本の自然主義文学の或る意味での完成者とも言うべき徳田秋聲氏なのだ。彼は「一つの特徴があれば芸術が成立つといふ気持」からは遠かった。このことは彼の芸術に対する高邁な覚悟を物語るものと言えようが、そのような衣裳に対する無関心は、また当時兎も角も一つの新しい衣裳を競って登場した若い谷崎・里見・芥川・久保田・佐藤の諸家——彼等は皆絢爛たる無比の衣裳家泉鏡花の名に繋がっている——から非常に隔った索莫たる場所に彼が己れの文学を築いたことを示してもいるのだ。

思うに日本近代の文学史上において、自然主義の運動が最も大きなものとされているが、その

裏面に、その唱導者達が長い不遇の修業期を経て、成年期になってようやく作家としての実を結ぶに至ったことから来る運動の確かさ、また根強さがそこに在ったことを考えないわけにはゆかぬ。彼等は巨樹がゆったりと根を張り枝葉を繁らせるように、悠然として何時の間にか揺ぎない地歩を占めた。花袋・藤村・独歩・泡鳴等、すべて青年時代は抒情詩人であった。これらのことは、彼等が明治以降の作家の中で、最もノルマルな成育過程を持つ機会に恵まれたことを意味する。彼等は世の中に浮び出た時、既に大人であったのだ。彼等は始めから素質的に写実派作家であったわけではなく、彼等の誠実さがおのずから彼等を近代写実文学の自覚へと導いたのであって、彼等が称して客観的態度と言うものは、それほど徹底した人生態度として身に著けられていたわけではなかった。宇野氏が言うように、彼等に「温い心」は有っても「冷い頭」は到底望み得べくも無かったのだ。ところで秋聲氏はこれらの詩人小説家達の中に在って、いささかの感傷も持合せない生れながらの散文家として現れたのだ。氏の客観的手法は単純明白なものである。日本の文学がかつて氏におけるほど細部の真実に輝いたことはなかった。退屈平凡な日常生活の冷静なまた細緻な観察は氏において完成されたものであり、それは言うまでもなくその後の身辺小説の氾濫に道を啓いたものだ。藤村氏の『春』『家』『新生』、花袋の『生』『妻』『縁』等は文字通りの私小説であるが、日本文学の私小説的性格を築く上に寄与したのは、それらよりもかえって私小説とは言えないところの『足迹』『爛』『あらくれ』等秋聲氏の作品なのだ。それは藤村氏等の文学が後に『夜明け前』のような一大叙事詩を産み出す機運を予想せしめるのに対し、秋聲氏のトリヴィアリズムは細部の真実に輝けば輝くほど、虚構の世界から遠ざかるべき契機を胎んでいたことを意味する。西洋において浪曼主義に対する近代写実主義の勝利が、「小説はその

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com